

年三月から十二年六月に至る分を収録してゐる。附録は一品宮御隠邸雜記で、明治十四年二月二十三日より十七年十一月二十九日及んでゐる。宛も明治十四年二月二十三日には俄仁親王神道教導職總裁に任ぜられ給ひ、それより幾多の曲折を経て十七年八月十一日教導職の廢止を見るに至つた。その間の経緯はこの一品宮御隠邸雜記に詳細を極め、明治初年の思想史神道史關係の事項を徵するに絶好の資料である。(高松宮家藏版、非賣品、共に菊判上巻五二八頁附録五五〇頁)

○京都帝國大學國史研究室藏史料集

昭和八年三月京都帝國大學國史研究室では、その藏する老大な文書、記録、資料等の内、精華五十五點を撰んで寫眞版となし、これに懇切なる解説を附して公刊し、斯界を益する事大であつたが、刊行以來二年半を経過して既に殘部なく、再版を要望する聲が高くなつた。こゝに昨年十一月京大文學部創立三十周年の祝典が盛大に舉行せられたのを機とし、内容は同一であるが、解説など多少の誤植を訂正し、寫眞版と解説とを共に一冊に合綴し、清楚な裝釘に附し普及版として刊行された。(京都星野書店、九冊)

(以上時野谷)

○蒲壽庚の事蹟

桑原 陸 藏著

宋元鼎革の際、提舉市舶即ち海外貿易の長官に任じたアラビヤ出身の蒲壽庚の事蹟を中心として、支那中世に於ける海上東西交

通の諸問題、その他の幾多のことを究明した本書の眞價に就いては、今更述べるまでもなく、帝國學士院賞が贈られたこと、英譯漢譯書等が行はれて居ることによつて知ることが出来る。今度新たに出版されたのは、さきに上海東亞政學會によつて刊行されたもの、増補改訂本である。博士は生前常に本書の増補訂正のことを念頭に置かれたのであつたが、遺憾にもその宿望を果されず逝去された。そこで、その遺稿を整理して出版したのが本書である。

博士は改訂本出版に際しては、餘程の加筆をなさんと考へられたるもの、ごとく、最初の數頁は可成り文章を改め、加之別に草稿をも作られてあつた。然しこれは僅かの部分に止まり、他は後日この草稿を作成せんとする用意として處々に——主として欄外に——覺書を記し、又誤植を正して置かれた。

本書出版に際しては、先づ本文中に挿入し得るものはこれを挿入し、然らざるものはその出典を檢索して、これを明示し、又必要なる範圍内で若干説明的字句を加へ、「増補」として「参照」の部の後に置いた。猶増補の部には稿本にはなく東洋文庫刊行の英譯本に見ゆる數項のもの、和譯をも合せ、而してその區別を明かにするために、後者の場合は\*印を附した。卷末の索引は語彙の排列が若干改まり、又新たに數を増した。又、本書には羽田博士が「本書發刊について」と題して序文を寄せられて居る。これによつて、増訂本出版の経緯や、著書の内容や價値を最も簡明に知ることが出来る。要するに、これを舊版に比較すると面目が一新して居る。

以上甚だ簡略ではあるが、こゝに本書出版の概略を記してその紹介に代ふることとする。この名著を東洋史専門家のみに限らず、敢て一般史家に向つて一讀を薦める。(岩波書店發行、四六倍判、定價參圓五拾錢)(小野)

### ○西洋近世史學史序説

千代田 謙著

現代ほど歴史に對する一般的な關心が昂揚された時代はない、とは最近屢々人の語るところである。

このことは、「歴史の世紀」と誇稱せられた前世紀の史學がそれに固有な特質のために主として實證的・文獻學的な線に沿うて異常な進展をとげたことに對して、最近に至つて漸く人がそれに對する理論的跡づけを試みようとするに至つたことに他ならないといふ風にも説明されうるのであらう。云はゞ十九世紀史學の黄昏に乘じて、ミネルバの梟がその飛翔を始めたのだとでも云へるかも知れない。

然しながら、このことは、更に深いそして現實的な事情に基いてゐるのではなからうか。現代社會が經驗しつゝある動搖と變化とが、人をして、現代が何か新しい未來に直面しつゝあること、すなはち現代が一の過渡期であることを感ぜしめ、そして現代のわれわれが歴史的な存在であることを意識せしめるがためではなからうか。

いま、このやうな事態に於いて、廣島文理科大学助教授千代田謙氏が、この「西洋近世史學史序説」を發表されたことは、まことに

に意義深いことと云はねばならないであらう。著者千代田助教授は、すでに數年前、「西洋史講座」(雄山閣發行)に於いて「近世史學史」を講述せられ、僅々百數十頁の紙數のうち、よく文藝復興期より十九世紀に至る史學史風の變遷の跡を尋ねられたのであつたが、今は、その舊著の第一章すなはち「近世初期史風の概観」に相當する部分をば、はるかに詳悉に且つまたはるかに完全な形に於いてと、のへられてゐるのを見ることが出来るのである。しかも尙、本書に題して「序説」と稱せられたのは、客觀的に、「こゝ」に取扱はれたる、ルネサンスより略々第十八世紀前半に亙るところの「時代そのものの史學史的性質」によるものであるとともに、また主觀的に、「著者の關心の第十八・九世紀を中心とせる見地」に基くものに他ならない。

さて、本書の内容とその構成を通觀してみよう。著者は先づ「史學史の一問題」と名づけられたその「緒章」に於いて、「歴史と史學理論、所謂哲學者の史學史と歴史家の史學史、史學史と思想史・文化史、等々およそ史學史にとつての根柢的な諸問題を問題としつゝ、みづからの歴史把握と、そしてこれと相關的に本書の「目指すところ」の「遡遠な」意圖とをば、提示せられてゐる。

この「緒章」に續く本論は、章に分たれること十、また各章は更に二つづつの節から成つてゐる。

第一章は、「人間主義への途」、「最初の人間主義者」と云ふ二つの節に分たれ、こゝでは、「人間を觀直す者」としての「最初の近代人」の「史的態度」が論ぜられ、續いて「人文主義の開拓者」とし